

羽豆崎城(羽豆城, 幡豆崎城)(知多郡南知多町大字師崎字明神山)(羽豆神社)

「羽豆」は「波津」あるいは「幡頭」などとも書く。羽豆城は熱田神宮大宮司藤原季氏の築城と伝えられ、年代は明らかでないが、「太平記」に暦応三年（興国元、一三四〇）、脇屋義助（新田義貞の弟）が美濃の根尾城から落ちのび、しばらくこの城に滞在したとあるから、南北朝初期であろう。また「信濃宮伝」には、宗良親王（後醍醐天皇の第八皇子）が信濃から尾張に出て、この城に立ち寄り、さらに海路伊勢を経て吉野に向かったとある。大宮司季氏は源頼朝の外祖父藤原季範八代の子孫で、尾張における南朝方の柱石の一人として、当城を拠点に活躍した。

城の位置は、知多半島の先端にあって、西は伊勢湾を隔てて伊勢・志摩に対し、南は三河の渥美半島を望み、尾張最南の城であった。現在、城址には雑木が茂っている。

この城には一時、土岐貞経の子蜂屋光経がいたこともあるが、戦国時代には、大宮司家の千秋季忠が城主となり、永禄三年（一五六〇）の桶狭間の合戦には織田方に属したため、今川勢の攻撃を受けて討死した。その後、廃城になった。

海上交通の要地なので、尾張藩成立後は、家臣千賀氏の所領となり、尾張水軍の基地として重くみられた。

（日本城郭体系による）

羽豆崎の地は、日本武尊の東征に水軍を率いて従った但馬連の拠点であった。

東征の帰途、水軍を統率した建稻種命が水難に遭い、流れ着いた衣服を祀ったのが、羽豆神社の始まりである。

南北朝の頃になると、羽豆崎には熱田大宮司、千秋昌能の拠点となり、南朝方に与している。

これは、東海道の陸路を足利氏に与する源氏一門が押えており（駿河今川氏・三河吉良氏など）、南朝方は北畠氏の拠点の東国との往来に、海路を使わざるを得なかった為である。

羽豆崎城は、その海路を押える重要な拠点であった。

南北朝の合一がなると、この地は一色氏に支配され、羽豆崎城には、一色氏の代官として佐治氏が、更にその陣代である千賀重親が入城した。

千賀氏はその後歴代の尾張の大名に仕えた。

関ヶ原の合戦では、師崎水軍が、伊勢の九鬼水軍を撃破しているが、豊臣氏が滅亡すると羽豆崎城は廃城となった。

千賀氏は、羽豆崎城の廃材で館を造営し、尾張藩の御船奉行として代々徳川家に仕えた。

城跡に登るには道路側から登る搦手コースと、海側から神社参道に従って登る大手コースがある。（水軍城なので、大手は海側と考えた）

岬の突端ではなく、最高所の展望台がある場所が主郭で、そこに城址碑が立っている。

特に遺構は残されていないが、大手コースの途中には、腰郭とも考えられる平場が、一箇所確認できた。

岬の上は想像以上に広く、ここに何箇所かの堀切を入れれば、かなり堅固な要塞になることは、容易に想像できる地形である。

帝國博物学協会による

